

日本語教師論入門

— 中国での実践を通して —

Introduction to Japanese Teacher's Theory

— Through Practice in China —

中国・浙江工商職業技術学院

松田 公平

MATSUDA, Kohei

Zhejiang Business Technology Institute

次世代教育学部教育経営学科

松田 智子

MATSUDA, Tomoko

Department of Educational Administration
Faculty of Education for Future Generations

キーワード：日本語教師，日本語教員養成の枠組み，教師の役割，中国での日本語教育，日本語教育史

Abstract：Since the 1980's, the amount of students outside of Japan wanting to learn Japanese has increased, which has resulted in a diversification of study needs. Nowadays, Japanese language education is at a transition stage.

During the time the writer was engaged in Japanese language education in September 2012, at a vocational university in China, there were many violent demonstrations all over China due to the Japanese government's claim of Senkaku Island, and many Japanese-owned businesses, including shops and supermarkets, were destroyed, either by looters or fell victim to arson.

Not only has this situation caused serious political or economic issues between Japan and China, it has also affected Japanese language education in China.

Given this situation, many questions arise. What is the meaning of Japanese language education for a Japanese teacher in China? What is the role of the teacher?

This paper will discuss the role of the Japanese teacher today with a focus on Japanese language education in China, and the history of Japanese language education.

Keywords：Japanese teacher, the framework of Japanese teacher's training, Role of a teacher, Japanese language education in China, the history of Japanese language education.

はじめに

今日の日本語教育をめぐる国内外情勢の概観は次のようなものである。

グローバル化の進展に伴って、海外の日本語学習者が増大し、学習目的も多様化している。国際交流基金（Japan Foundation 以下JF）の調査によれば、2006年時点でおよそ300万人の日本語学習者が東アジアを中心とした海外にいると見られている。1990年代初頭と比べて、学習者数は約3倍となっている。同じくJFの2009年の調査速報によれば、さらに学習者数が約365万人（2006年比、約23%増）と急速に増大している。特徴的なことは、東アジア、東南アジアで海外の

学習者全体の約80%を占めていることである。

学習目的で見れば、「日本の文化に関する知識・情報を得るため」、「日本語によるコミュニケーションができるようになるため」、「日本語という言語そのものに興味があるため」の三つが主要なものとなっている。

しかしながら、海外においては「教材不足」「設備不十分」とともに日本語教員が質量ともに不足していることが指摘されている。海外では日本語を母語としない非母語話者日本語教師が約7割と報告されているが、北米・西欧に比べて日本語学習熱が高まっている東アジア、東南アジアでネイティブの教師、すなわち日本人の日本語教師不足が目立ち、それが問題点の一

つであると言われている。

一方、国内では少子高齢化、人口減少の趨勢が一段と進むなかで、定住外国人が増加し、日本社会の「多文化共生」ともいべき現実が確実に進行している。

法務省入国管理局の発表によれば、2010年末現在、国内の定住外国人はおよそ213万人、人口比で1.67%になっている。

経済のグローバル化の進展、国際結婚の増加や国内の人手不足を背景に、1990年の入管法改正を契機にこの趨勢は一段と強まっている。

日本語学習者も年々増加しており、文化庁の調査によれば2009年11月1日現在、国内ではおよそ17万人の学習者が1,655機関・施設で日本語を学んでいる。ただ、ここでは定住外国人総数と比べて国内の学習者が極めて少ないことに留意しておく必要があると考える。また大学や日本語学校など日本語教育専門の機関・施設から、いわゆる地域の日本語教室でボランティアから日本語を学ぶ学習者が近年とみに増加していることも注目すべき変化である。今や、学校だけが日本語を学ぶ場ではなくなりつつある。

日本語教育は、今日、その過渡期を迎えているように思われる。

筆者は、2010年9月から中国・浙江省寧波市にある専門大学で日本語教師として働いている。その中国で2012年9月、日本政府の尖閣諸島国有化を契機に、それに反対する反日デモが中国全土で大規模に引き起こされ、日本企業の工場やスーパーが放火されたり、破壊されたりするという事態が発生した。中国政府の規制によって、その後反日デモは鎮静化しているが、日中間の対立は国交正常化以来、過去40年間で最悪と言われている。

日中関係の悪化は、政治・経済の分野のみならず、中国における日本語教育にも深刻な影響を与えつつあり、中国在住の日本人日本語教師もその影響を受けざるを得ない。

本稿は、こうした状況を踏まえて、日本語教師論について一般的に述べるだけでなく、中国で日本語教育に携わる意義に焦点を当てて、今日求められる日本語教師の役割、その在り方について検討しようとするものである。その際、先人の経験、すなわち日本語教育史の教訓からも学ぶことが必要であり、日本語教師の歴史観についても論考しようとするものである。

I 日本語教員養成の枠組み（日本語教師の資質と能力）

日本語教育は、日本語を母語としない学習者を対象に行われる教育であり、日本語教師には学校教育における国語教育を指導する教師のような教員免許はない。しかしながら、日本語教師には一定の資格が必要であり、実際に日本語教師になるためには次の三つの方法が一般的である。

- (1) 大学で日本語教育を主専攻、または副専攻として学ぶ。
- (2) 大学を卒業し、日本語教師養成講座（420時間）を修了する。
- (3) 日本語教育能力検定試験に合格する。

現在、大学や民間の日本語教育施設で行われている日本語教師養成の内容は、2000年3月に発表された「日本語教育のための教員養成について」（日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議 以下報告書）を基準としている。その枠組みは以下のようなものである。

① 日本語教員として望まれる資質・能力

「日本語教員として望まれる資質・能力として、まず基本となるのは、日本語教員自身が日本語を正確に理解し的確に運用できる能力を持っていることである」と指摘し、具体的には次の4点を挙げている。

- ア 言語教育者として必要とされる学習者に対する実践的なコミュニケーション能力を有していること
- イ 日本語ばかりでなく広く言語に対して深い関心と鋭い言語感覚を有していること
- ウ 国際的な活動を行う教育者として、豊かな国際的感覚と人間性を備えていること
- エ 日本語教育の専門家として、自らの職業の専門性とその意義についての自覚と情熱を有すること

また、「日本語教育の専門家として、個々の学習者の学習過程を理解し、学習者に応じた適切な教育内容・方法を判断し、それに対応した効果的な教育を行うために」、次のような専門的能力が必要であると指摘している。

ア 言語に関する知識・能力

外国語や学習者の母語（第一言語）に関する知識、対照言語学的視点からの日本語の構造に

関する知識，そして言語使用や言語発達及び言語の習得過程等に関する知識があり，それらの知識を活用する能力を有すること

イ 日本語の教授に関する知識・能力

過去の研究成果や経験等を踏まえた上で，教育課程の編成，授業や教材等を分析する能力があり，それらの総合的知識と経験を教育現場で実際に活用・伝達できる能力を有すること

ウ その他日本語教育の背景をなす事項についての知識・能力

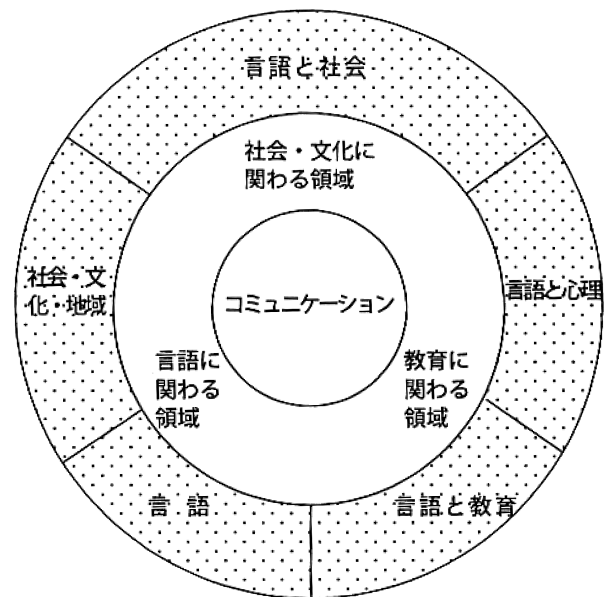
日本と諸外国の教育制度や歴史・文化事情に関する知識や，学習者のニーズに関する的確な把握・分析能力を有すること

② 新たに示す教育内容

同報告書はまた，日本語教育の内容に関して以下のような考え方を提示している。

日本語教育とは，広い意味で，コミュニケーションそのものであり，教授者と学習者が固定的な関係でなく，相互に学び，教え合う実際的なコミュニケーション活動と考えられる。また，このような包括的概念としてのコミュニケーションは，今回新たに示す教育内容のすべてに共通しその根底をなすものであり，教育内容の基本となるものである。そこで，その核となるコミュニケーションと，新たに示す教育内容を構成する諸領域・区分との関係を表すと次のようになると述べて，「社会・文化に関わる領域」，「教育に関わる領域」，「言語に関わる領域」の3つを設定し，「それぞれはあえて明確な線引きは行わず，段階的に緩やかな関係ととらえ，また優先順位を設けず，いずれも等価と位置付ける

この考え方のもとに，その領域の区分として，「社会・文化・地域」，「言語と社会」，「言語と心理」，「言語と教育」，「言語」の5つの区分を設けて，次のような図を掲げている。



新たに示す教育内容の領域・区分とコミュニケーションとの関係図

現在の日本語教師養成は，大学でも民間の日本語教育施設でも概ねこの報告書に示された教育内容を枠組みとして，それに個々の大学や養成機関の個性，特徴，方針などを反映させて運営されているのが実情であろう。今後の情勢の変化や政府の政策によって，将来は見直されるかもしれないが，当面はこの枠組みに示された内容で日本語教師の養成が行われていくと考えられる。

II 教師の役割

日本語教師は教員免許こそないものの，語学教育を通して学習者の人生にコミットしていくわけであるから，当然その責任と自覚を持たなければならないことは論をまたないであろう。

梶田（2007，pp6）は，『「教育は人なり」』である。どのような教育改革を行おうと，教師に人を得なければ学校がよくなることはない」と述べて，教師として不可欠な要素として「使命感の自覚」と「職務遂行能力」を挙げている。

梶田の主張は日本語教師向けに書かれたものではないが，およそ教師と呼ばれる人にとっては，この「使命感」と「職務遂行能力」は片時も忘れてはならない重要な視点であると考えられる。

日本語教育の分野から日本語教育の目的や教師の役割について言及しているものに，青木（2001），山田（2001）などがある。

青木（2001）は，日本語教育の目的は「学習者の中

に新しいものを創り出す力を育てること」であると述べて、その「新しいもの」とは「学習者が自分の人生の質を高めるために必要な自己イメージであり、人間関係のあり方であり、社会のシステムである」と指摘している。そして自分のことは自分で決める、自分の力でよりよい学習を創り出していく能力をさす「学習者オートノミー」(learner autonomy) という概念を提唱し、教師の役割はその学習者オートノミーを育て、支援することであると主張している。

一方、山田(2001)は、「『文化の相違』を人間社会のよりよいありように生かすような取り組みこそ必要だ」と述べ、「日本語教育も『多文化主義』にのっとった『地球市民教育』(global education)であるべきである」と主張している。

山田によれば、地球規模での社会的不公正や環境問題の克服には、一国的な見地・対応では限界があるからである。そして日本語学習者だけが学ぶ当事者ではなく、日本人等の側も、これら日本語学習者と教師やボランティア、隣人、友人などとしてのかかわりから学び、ともに社会の対等・平等な構成員として社会参加していくための相互学習の取り組みが求められていると述べている。

青木(2001)や山田(2001)の論点は、今日の日本語教育の世界では代表的な主張の一つであると筆者には思われる。そこに共通しているのは、日本語教育をより広い視野から捉えようとする視点であり、日本語教育および教師の役割が単に学習者のコミュニケーション能力を育成するだけでよしとしない考え方である。

青木(2001)はまた、教育の目的について、一つは伝統を次の世代に伝えること、もう一つは未来の社会のために新しいものを創り出す力を育てることであると述べ、前者は、人を社会に適応させるという側面が強調され、後者は、教育が社会を変える可能性をも示唆しているという点で対照的であること、日本語教育はいくつかの理由から後者のタイプの教育についてより多く考えるべきだと指摘している。

筆者は、青木や山田の主張について、日本語教育の可能性を検討する上でも、教師の役割について考察する上でも、評価し耳を傾けるべきであると考え。とはいえ、前記の報告書の枠組みで提示されている、日本語教員として望まれる資質・能力、専門的能力を有することが依然として日本語教師の基本的な条件であることは変わらない。そのことを認識した上で、日本語教育の担い手である日本語教師には学習者を指導す

る強い使命感と自覚が求められていると考える。

Ⅲ 日本語教師として中国で日本語教育に携わる意義

Ⅲ-1 中国における日本語教育事情

JFの調査によれば、2009年現在、中国には約83万人の日本語学習者がいる。国別に見れば海外では韓国に次いで、2番目に学習者が多い国ということになる。実際にはこの調査には含まれない独学の学習者も相当数いると見られ、実質的には中国が世界で日本語学習者が一番多いとする見方もある。

中国での日本語教育の特徴は、学習者の全体数が多いこと、日本語の中・上級段階に達する学習者が非常に多いと言われていることである。初等教育段階でも一部の地域で実験的に日本語学習が行われているが、多くは中等教育以降、特に高等教育、すなわち大学や専門大学で日本語教育が行われている。以下の内容は、中国の日本語教育について言及されているJFのHPからの引用である。

日本語能力試験の基準で言えば、中等教育あるいは大学の第二外国語教育でN4、第一外国語教育でN2、専門教育では在学中にN1レベルに達する者も多数いる。教師の日本語力も全般に高く、大学教員の場合、日本で学位を取得した者も少なくないと言われている。

学校教育以外でも、各種の一般成人向けの日本語クラスによる日本語学習者の数は相当数にのぼり、大学が運営する出国者向けの日本語クラスも盛況である。また、仕事上での必要度に関わらず、昇進や各種資格取得試験のために日本語を学習する者もいる。さらに最近では、大学に進学できなかった高校卒業生向けに、日本国内の提携先の日本語学校を経由して日本の大学等への進学を謳って学生募集を行う民間の日本語学校が増えている。日系企業や日本・日本人との取引が多い地元企業の中には、従業員向けに企業内日本語教育を行なっているところもある。さらには、教科書、DVD等による独習用教材も書店に多く並び、そうした教材によって自学自習している層も相当数存在する。

同じくJFの調査によれば、現在中国で雇用されている日本人教師は、日本の機関(JICA、日中技能者交流センター、文部科学省REXプログラム、中国の

機関と姉妹関係にある学校等)を通して派遣されている者と個人契約の者がいる。2009年調査によると母語話者教師は2,479名おり、教師数の約16%を占めている。ちなみに、筆者も個人契約の部類に入る。

一般的には中国での日本人教師は数年で交替するため、各機関のコースデザイン等に関わることは非常に少なく、会話や作文などのアウトプット型授業を担当することが多い。

以上の全般的状況を踏まえて、筆者が勤務する浙江工商職業技術学院(以下工商学院)とそこでの状況を次に述べる。

工商学院は中国では専門大学に位置づけられる。専門大学というのは三年制の大学であり、四年制の大学(本科の大学とも呼ばれる)と区別するための呼称である。日本風に言えば専門学校ということになる。工商学院は前身の商業学校時代を含めると長い歴史があり、2012年に創立100周年記念を迎えた。学生数が約9,000人、教職員数は700人余を抱える中国では中堅規模の学校である。準公立とも呼べる学校で、学費が比較的安く、就職も一定のレベルを保持しているために、学生は浙江省全域から集められる。

筆者は、工商学院の国際交流学院(日本の学部に対応する)応用日本語科に所属し、そこで日本語教育に携わっている。

Ⅲ-2 担当する日本語学習者の現状と意識

工商学院の日本語科は一学年50人が定員であり、筆者はそこで一年生から三年生まで全学年の学習者に日本語を教えている。全員が中国語母語話者で、大学で初めて日本語を専門的に学習する者ばかりである。学生の男女比は9対1と日本語科では圧倒的に女子学生が多いのが特徴である。

三年間の学業を終えるとほとんどの学生が就職する。ごく一部の者は上級学校への進学、日本への留学等で学習を継続するが、その割合は全体の一割程度と非常に少ないのが現状である。

筆者は工商学院では、読解、聴解、会話、作文、日本事情などの科目を担当してきた。また課外授業としては、日本語能力試験対策のN1・N2の語彙・文法、日本文化体験のための「日本の正月」「日本の運動会」といった講義や活動、日本語スピーチ、日本語劇などの指導も担当している。

専門大学は三年制であるが、中国では最終年次の第二学期は実習、卒論作成に充てられるため、実際には日本語学習の期間は2年半しかない。学習者のレベル

は、日本語能力試験の基準で言えば大半がN2またはN3レベルであり、ごく一部ではあるがN3レベルにも到達しない者もいる。概してレベルはそれほど高くないのが実際である。

しかし、学生の人柄はよく、純朴な学生が多いように感じられる。都会生まれ、都会育ちの学生もいるが、大半が浙江省一円の地方都市、農村出身であり、人に対して親切で、仲間思いの学生が多いように思われる。学生の姿を見ていると中国社会、中国の大地がこのような人間を育てたのであろうということを強く感じざるを得ない。

他方で、語学学習という面から見れば学生の意識は高いとはいえ、教師からすると物足りないと感じる面があることも事実である。特に学生の視野の狭さ、自発的な学習への意欲の不足は、情意面の育成をおろそかにしてきたそれまでの教育の問題点ではないかとさえ思われる。

このような学習者の意識を具体的に探るために、筆者は2012年12月、工商学院日本語科の三年生38人を対象に日本語学習への意識調査を目的としたアンケート調査を行った。(アンケートの内容は巻末に資料として掲載するので参照されたい。アンケート回収率は97%)以下はその調査結果の分析である。

まず、日本語学習のきっかけ・動機であるが、一番多いのは「日本のアニメや映画を見て興味を持ったから」が43%、次いで「就職に有利になると思ったから」が27%、三番目は「その他」の16%である。その他の理由としては「友人などの影響で」「第一志望ではないが学校から日本語科にまわされた」などを挙げている。「日本の文化や社会に興味があったから」は5%、「先生や親にすすめられたから」は8%で意外に少ない。

ちなみに、学習者が好きなアニメとして挙げているのは『名探偵コナン』『ONE PIECE(中国名では“海賊王”)』『ナルト』『美少女戦士セーラームーン』『犬夜叉』宮崎駿作品などで、子どもの頃から現在まで親しんでいるようである。

二番目の項目「日本語を勉強してどうでしたか」については、「とてもよかった」が8%、「よかった」が41%、「よくなかった」が49%、「わからない」が3%で、「よかった」と「よくなかった」が半々で拮抗している。

「とてもよかった」「よかった」の理由としては「視野や知識が広まった」「日本のことを学べた」「もう一つの外国語を勉強して楽しかった」などを挙げている

る。一方、「よくなかった」の理由としては「文法や語彙が難しい」「日本語で話したり交流できない」「日本の文化は複雑でよくわからない」「仕事を探すのが難しい」「元々、自分の希望ではない」などを挙げて、日本語が身につかず、不満足な結果になったこと、日本語を勉強したものの就職が簡単ではないこと、不本意に学ばせられたこと等を挙げている。

学習者の半分がこのような意識・不満を持っていることがうかがわれ、教師としては重い課題を突き付けられているように感じる。ただ、結果が学習者にとって望ましいものではなかったとはいえ、学習者が日本語学習そのものを否定しているわけではないことは次の質問から理解できる。

三番目の項目「日本語を学習しているときの感覚」は、「おもしろくて役に立った」が65%、次いで「役に立ったが、おもしろくなかった」が14%、「喜びだった」が14%となっており、日本語学習自体は8割近くの者が一応肯定的に捉えている。

四番目の項目「就職」に関する質問では、「日本語と関係がある仕事をしたい」がトップの41%、次いで「方針をまだ決めていない」が24%、以下「日本語と関係なく就職を考えている」が19%、「日系企業に就職したい」が16%の順になっている。結果はともかく、およそ6割の者が日本語と関係が深い就職を希望していることがわかる。これは日本語学習者として当然のことであろう。

五番目の項目「チャンスがあれば日本へ行きたいですか」については、89%の者が「行きたい」と答えており、「行きたくない」はゼロであった。日本で何がしたいかについては「観光・買い物」が圧倒的で、留学や仕事を挙げる者はわずかだった。日本語学習を通して、日本についての一定の知識があり、親しみを抱いていることがうかがえる。

六番目の項目「日本人教師への要望」については、「要望がある」が35%、「要望がない」が35%、「わからない」が30%であった。要望の内容は、「教科書以外の日本のことをもっと教えてほしい」「日本のおもしろいことを話してほしい」「もっと親しく交流してほしい」などであった。一方、「要望がない」の理由としては「日本人の先生は真面目で親切です」「日本人の先生はいい人で責任感があります」などという現状に満足しているという意見・感想が多いのが特徴であった。

七番目の項目「卒業後も日本語学習を続けますか」については、「続けるつもりだ」が51%、「続けるつも

りはない」が16%、「わからない」が32%で、約半数が卒業後も日本語学習を続ける意思を持っていることがわかる。

最後の項目「今後の日本、日本人との関係について、どんなことを希望するか、意見を自由に書いてください」は、三人の無記入または「わかりません」などを除くと全員が「友好的に付き合う」「永遠に友好」「関係がよくなることを希望する」と書いている。日本語学習者ならではの意識を反映した意見であることが見て取れる。

Ⅲ-3 中国で日本語教育に携わる意義

2012年9月、中国全土で激しく引き起こされた反日デモとその後の日中関係の悪化は、人々の意識や今後の中国の日本語教育にも深い影響を与えている。

同僚の中国人教師たちが今一番心配しているのは2013年以降の学生募集がうまくいくかどうか、従来通り定員の学生が集まるかという問題である。当該学科の学生募集の成否は死活問題だからである。その結果は、私たち日本人教師の去就にもかかわることであり、当然のことながら筆者も無関心ではられない。現高校生とその両親の意識が気になるどころであり、高校教師の進学・進路指導等にもこの日中間の対立が深く影響するのではないかと危惧している。

すでに日本企業の中には中国リスクを回避するために中国からの撤退や東南アジア等への工場・資本等のシフトを決定したとの話も聞く。そうすると仮に次年度の学生募集がうまくいったとしても、将来の就職先等が先細りするのには目に見えている。工商学院のような学生の就職につながる職業技術能力の育成を学校の使命としている職業技術学院系の学校が受ける影響は大きいと考えざるを得ない。

日中間の経済的な結びつきの強さ、すなわち相互依存関係の深さから、事態は早晩収束に向かうだろうとの楽観的な見通しも一部にはあるようであるが、今後の推移を注意深く見守っていく必要があると考える。

ただ、誤解のないようにしてほしいことがある。反日デモが中国各地で激しく荒れ狂っていた時期とその直後に、日本の家族、友人、知人等から安否を心配するメールをたくさん受け取ったが、筆者は身の危険を感じるようなことは今まで一度もない。

「日本人だとわかると殴られると聞きましたが、大丈夫ですか」というのは極端であるにしても、その種の中国認識が日本人の中にまだ多いような気がしてならない。

日本人の中国認識はその多くがマスコミやインターネットからの情報で形成されているようであるが、中国在住の筆者のようなものから見れば家族や友人たちが心配してくれるのをありがたいと思う反面、そこにギャップを感じざるを得ないのが実情である。なぜならば、学習者や同僚、周りの中国人との関係も良好であり、学校の構内に居住しているから日本で心配するようなトラブルは起こりようがないからである。

中国は今はかなり変わってきているとはいえ、依然として単位社会と呼ばれる一種の共同体ともいうべき自己完結型社会システムがあるからでもある。大きな企業、学校などは今もこの単位社会の影響があり、そこにはスーパー、銀行、郵便局から各種の商店・サービスを提供している店等があり、その居住地単位で一応の自足的な生活ができるようになっている。筆者も工商学院の敷地内にある教師用アパートに住んでいるので、こちらから危険なことに近づかない限り、安全には心配がないというわけである。なお、ここで挙げた単位社会については、中国文学者の藤井省三(1999)を参照してほしい。また、ジャーナリストの上村幸治(1999)もこの単位社会の変容を含めて、市場経済導入後の中国社会の光と影をジャーナリストならではの取材と鋭い観察で活写していて興味深い。

2011年3月に東日本大震災が起きた時も周りの中国人教師や学習者は心配して声をかけたり、励ましてくれたりしたが、今回の反日デモが起きて以後も、彼らの日本人教師への態度や対応に変化はない。引き続きとても親切で、友好的である。

買い物や用事等で日常的に学外、寧波市の中心である天一広場などにも出かけるが、一般の中国人に関しても同様に反日デモが起きる以前と変わったところはない。筆者は中国人・中国社会を理解するためにも、また中国語によるコミュニケーション能力を身につけるためにも日本人であることを明かして積極的に庶民と交流することを心がけているが、親しみやすく人懐こい人々が多いように感じられ、一般の中国人の中に反日感情が渦巻いているなどとは到底感じられない。日本人と同じように、またある意味では日本人以上に親切な中国人が多いように思われる。

しかしながら、2012年10月以降、インターネット上でアニメなど一部を除いて日本の映画やテレビドラマなどが見られなくなったのは事実である。それ以前は自由にアクセスして日本の映画やドラマを視聴することができたが、現在は不可能である。当局の規制によるものであると思われる。

また、11月には党大会の開催を前後しておよそ3週間にわたってYAHOO! JAPANが自由に使えないということも起きた。それ以前も突然に、しかもしばしばその種の不自由さがあったが、現代人にとって決定的に重要な情報の収集・検索・やり取りが規制される社会であることは甚だ遺憾に感じられ、そうしたところにも日中間の対立の影響が現れているように思われる。

周知のように反日デモが起きてから、国交正常化40周年記念行事をはじめ、政府・地方自治体、民間団体を含むさまざまなレベルの文化的・人的交流が中止されたり、延期を余儀なくされ、日中関係は今、各分野で縮小傾向にある。日本を訪問する中国人観光客も激減したとも聞く。前述したように日本語教育においても今後じわじわとその影響が及ぶことが予想され、その行方が懸念される。しかし、断片的なマスコミ、インターネット情報等によって踊らされることなく、冷静な見方でその推移を見守ることが肝要ではないかと信じる。

筆者は、日本の専門学校でおよそ20年の日本語教育の経験を経て、中国で日本語教育に携わっている。中国に来た動機は、若い頃からさまざまなつながりと縁があった中国で、日本語教育を通して次世代の相互理解と友好交流に微力を尽くしたいという思いであった。この願いの下に、日々の実践に取り組んでいる。40年間にわたる中国とのかかわりの中で、日中戦争、新中国の成立、文革、改革開放と今日の経済発展など現代中国の事情にある程度通じているという自負もあった。

筆者には中国人、中国社会と向き合うとき、日本語教師というよりもそれ以前の一人の日本人として接するという意識が強く、そのことが頭を離れない。意識の根底にそのような考え・見方が横たわっているというほうが正確かもしれない。そうした認識は、アヘン戦争以来の欧米列強に日本が加わって中国を切り取り、中国人が苦難の歴史を歩んできたということと切り離しては考えられない。特に太平洋戦争、第二次世界大戦の重要な構成部分であった日中戦争、その戦争において悪名高い三光作戦・七三一部隊、さらには大量虐殺や中国の奥地まで侵入して展開された戦争を考えると、厳粛な気持ちにとらわれる。そして日本人とは何か、中国人とどのように付き合うべきかを深く考えざるを得ず、歴史と向き合って生きていく重みを感じずにはいられない。

中国人は友誼に厚く、誇り高い国民である。その中

国人が中華復興の理念の下、誇りと自信を取り戻し、世界と伍していくことはよこばしいとさえ思える。他方で日本人もまた先人の営々たる努力によって、住みやすく安全で快適な社会をつくってきた。日本語教師を始めてから筆者も日本人の崇高さに気づき、今では日本人の一員であることに誇りをもっている。

筆者の中国に対するこうした見方と意識はまた、これまでの経歴や個人的事情と無関係ではない。筆者の両親は旧満州（中国東北部）からの引揚者である。また筆者は、かつて日中友好運動に参加し、学生訪中団の団長として国交回復直後の中国訪問の経験がある。日本語教育を通して数多くの中国の若者に接してきた。また夏休み等に中国の大学生の日本への短期研修旅行を受け入れて、交流・お世話をした経験も何度もあり、中国残留邦人家族二世への日本語支援、日本の高校への進学を希望する中国から来た中学生・高校生相当の若者への日本語教育と進学支援の経験なども有している。

これらのすべてが融合して筆者の中国人と中国に対する意識と見方が形成されてきたものであることは疑いない。そこで、筆者なりに中国で日本語教育に携わる意義と教師の役割をまとめると次のようになる。

まず日本語教育に携わる意義についてであるが、筆者も日本語教師として学習者に日本語によるコミュニケーション能力を身につけることの指導だけに専念すればよく、「政治や歴史は関係がない」という立場はとらない。日本語教師の仕事を単に語学教師として割り切って、日本語を教えるだけでいいとは思わない。IIでも述べたように日本語教育をもう少し広い意味でとらえ、日本と中国との相互理解、友好交流に資するものと考え、実践していきたいと思っている。

だが、この相互理解が実は大きな課題であり、それを進めていくのは並大抵のことではないことをよく認識すべきであるとも考える。なぜなら、日本人から中国を見る場合も、中国人から日本を見る場合も、その見方の根底にあるのはそれぞれの社会で培われてきた常識や尺度・基準が作用していることが多いからである。しかし、社会や文化が違えばその尺度は通用しない。そのような見方からは相手のことを正しく理解できず、表層的な理解にとどまるしかない。それどころか、ある場合には反発や否定的な結論に至ることもあり得るだろう。

ではどうするか。やはり直接的な見聞や交流が必要であり、文化の違いや社会制度・社会関係、歴史などについて時間をかけて互いによく学ぶ必要がある。そ

のイメージとしては、バイリンガルの人々が相手に合わせて言語のコードスイッチ（切り替え）をするように、学習者にも教師の頭脳にも一つだけではなく複数の回路やチャンネルを形成していくことが必要ではないかと思う。

またこのことを検討する際、筆者はEUの理念とその中心であるドイツ、フランスの経験を日中両国の国民が参考にしてそこから深く学ぶことが大切であると考える。ドイツとフランスは過去何百年も互いに憎み合い、殺し合う戦争をやってきた間柄である。しかしながら、今日では第二次世界大戦の深刻な反省から両国が共存していく道を探りだし、その理想は紆余曲折を経ながら、また内部に脆弱性をはらみながらもヨーロッパ全域に拡大している。日本人も中国人もこのヨーロッパ人の智慧から大いに学ぶべきではないだろうか。

筆者は、日本語教育を通して学習者の中に、日本と日本人を理解するチャンネル、すなわち社会文化的な能力をも育成したいと願っている。そのチャンネルとは、日本理解の鍵となるような日本人の感性や考え方・価値観への理解であり、日本社会の実実への知識・認識にほかならない。そして、そのことこそが中国で日本語教育に携わる意義であり、相互理解にも貢献し得ることにつながるのではないかと考える。

こうした観点に立って、中国での教師の役割については以下の三点を具体的には考えている。

第一に、学習者に日本語によるコミュニケーション能力・実力をつけさせることを目標に、その実現に全力を挙げて取り組むこと。日本語を使う環境が限られていることを考慮して、学習したことを保持できるような方法を考えること。

第二に、学習者の就職や留学などの相談・支援を行い、学習者が直接的に日本・日本人とつながるように努力すること。また卒業後も日本語学習の継続を希望する学習者にさまざまな情報提供・支援を行い、日本への関心を保持し、日本理解が深まるように促すこと。

第三に、日本への見方、日本人に対する理解が深まるように、さまざまな機会を利用して日本理解へのチャンネルを学習者の中に育成すること。

筆者の考えるこうした内容が中国在住の日本語教師に賛同を得られるかどうかはわからない。また日本語教育の在り方から見て妥当であるか否かもわからない。しかし、筆者はこのような道を歩み、日本語教育を通して日本と中国との架け橋の一人になりたいと

願っている。

IV 日本語教育史から学ぶ

言語はコミュニケーションの道具・手段であると同時に思考・認識の道具でもある。このような性質から、言語は常に為政者によって利用され、異民族への支配、侵略に使われてきた。よく知られているように日本語教育も戦前の日本のアジア侵略に積極的な役割を果たした歴史をもっている。

前章で述べた中国だけではなく、台湾、朝鮮半島、東南アジア諸国、南洋諸島など広大な地域で行われた日本語教育が現地の人々の日本化を促す手段として使われたことを忘れるわけにはいかない。

戦後は形を変えて、もっとソフトかつスマートに政府の支援や援助が国内外の日本語教育に対して行われている。政府が、海外での日本理解を促し、ひいては親日家を育てるための日本語教育施策を外交政策の一環として実施していることは明らかであろう。国家の言語政策がもつそうした側面を語学教師は十分認識しておく必要があるだろう。

こうした点について関（1997 pp3-4）は次のように述べている。

かつて、日本語を母語としない人々に対する日本語教育（「国語教育」という名でなされたものも含めて）が異常に盛んな時代があったということ。それは日本の覇権主義的侵略政策の下で、アジアの民衆に対して有無を言わず行われたことがあったということ。

少なくとも、日本語教育にたずさわる者は、このような認識に立って、日本語教育の真の歴史を知り、今後の日本語教育のありべき姿を考えていかなければならない。（中略）戦前から戦後にかけての日本語教育史の激変ぶりを見ても、日本語教育はその時々時代の趨勢にいと簡単に押し流されるという不安定性をはらんでいることに気づく。であるからこそ、日本語教育にたずさわる者は、日本語教師自らのあり方、日本語教育のあり方を常に問いながら、時代の波に翻弄されない足腰のしっかりした日本語教育の確立を目指していかなければならない。

けだし、名言である。日本語教師一人一人が自らを見つめ、その立脚点や歴史観をはっきりさせていくこ

とが求められていると考える。

ただ、日本語教育史には負の歴史だけでなく、学び受け継ぐ面も多々ある。その一つが松本亀次郎（1886-1945）の功績である。

さねとう（1981 pp340）は次のように述べている。

松本先生とは松本亀次郎先生——そういってもたいていの日本人にはピンとこないであろうが、中国人にはよくおぼえている人がたくさんある。一口でいえば、第一期中国人日本留学史のなかの、日本人教師の中心人物、第一期留学史で、日本語教育の代表者である。

さねとうによれば、第一期中国人日本留学とは1896年から1937年までの40年間をさす。松本亀次郎は、その40年のうち35年を留学生教育にささげ、特に後半の30年は中心人物であったという。松本が直接教えた留学生は2万人にもほり、その中には有名な魯迅、中国革命の途上で殉じた秋瑾女史も含まれている。松本はまた請われて1907年から1912年まで北京の京師法学校でも日本語を教え、1930年には中国学事視察も行っている。松本は日華共存共栄を望み、日中関係の悪化の中で晩年は苦悩の日々を送ったという。

前述の関（1997 pp89）も松本について次のように取り上げている。

松本の日中交流史に残した功績は現代でもなお中国の人々に高く評価されているが、それは、上記のような著名な歴史的人物の師だったからだけではない。一貫して留学生の立場に立って考え、彼等を愛し、そして、留学生教育の意義は彼等の国のためにあるのであって、決して日本の侵略政策の片棒をかつぐためにあってはならないことを看破していたからである。

日中関係が激動し、今後の展開が予断を許さない現下の状況にあって、信念の人・松本亀次郎から学ぶことは重要な意味を持つと考える。

日本語教育はその内容と性質から、異文化間コミュニケーションと呼ばれることがある。異文化間のコミュニケーションは、相互理解とお互いの歩み寄りが原則である。そこには優劣関係も上下関係もない。筆者は中国での日本語教育にもこの原則を適用すべきだと考えている。日本語教師が否応なく日本と日本人

を学習者に向かって発信する存在であることを自覚して、自分に与えられた場・自分が置かれた場で日々の実践に励みたいと願っている。

おわりに

日本語教育は誰のためにあるかという問いに対して、筆者は学習者とその未来のためのものであると考えている。もう一つの問い、では何のためにあるのかに対しては、世界の平和と相互理解のためであると答える。この二つが筆者が日本語教師を続ける理由であり、世界の平和と相互理解は切なる願いでもある。

本稿は「日本語教師論入門」というタイトルで、中国を念頭に主として日本語教育と教師の役割に論点をしばって扱った。本来ならば教師論のもう一つの側面である教え方や日本語教授法、具体的なスキルについても言及すべきであるが、それが果たせなかったことをおことわりしておきたい。

日本語の教え方、スキル等については、拙著『日本語教師になる人のために』（ブックレット）を参照してくださいようお願いします。

引用・参考文献

- 1) 青木直子 (2001) 「教師の役割」 青木直子・尾崎明人・土岐哲 (編) 『日本語教育学を学ぶ人のために』 世界思想社, pp182-197.
- 2) 天児慧 (1999) 『中華人民共和国史』 岩波新書
- 3) 文化庁のホームページ
<http://www.bunka.go.jp/>
- 4) 王柯 (2005) 『多民族国家 中国』 岩波新書
- 5) 尾崎明人 (2001) 「日本語教育はだれのものか」 青木直子・尾崎明人・土岐哲 (編) 『日本語教育学を学ぶ人のために』 世界思想社, pp3-14.
- 6) 法務省入国管理局のホームページ
<http://www.immi-moj.go.jp/>
- 7) 梶田叡一 (2007) 「師道再興」 梶田叡一 (編) 『教育フォーラム40 教師という道』 金子書房, pp6.
- 8) 鎌田首治朗 (2011) 「国際教育の必要性と日本語教育の重要性」 梶田叡一 (編) 『教育フォーラム48 国際教育の課題と展望』 金子書房, pp38-48.
- 9) 上村幸治 (1999) 『中国路地裏物語』 岩波新書
- 10) 国際交流基金のホームページ
<http://www.jpf.go.jp/>
- 11) さねとうけいしゅう (1981) 『中国留学生史談』 第一書房, pp340-366.
- 12) 斯波義信・浜口允子 (1998) 『中国の歴史と社会』 放送大学教育振興会
- 13) 関正昭 (1997) 『日本語教育史研究序説』 スリーエーネットワーク, pp3-5, pp85-90.
- 14) 藤井省三 (1999) 『現代中国文化体験』 岩波新書
- 15) 松田智子・松田公平 (2011) 「多文化共生社会と日本語教育」 梶田叡一 (編) 『教育フォーラム48 国際教育の課題と展望』 金子書房, pp27-37.
- 16) 山田泉 (2001) 「異文化間コミュニケーションと日本語教師」 青木直子・尾崎明人・土岐哲 (編) 『日本語教育学を学ぶ人のために』 世界思想社, pp198-209.

日本語学習についてのアンケート

番号 () 名前 ()

1 あなたが日本語を学習しようと思ったきっかけ・動機は何ですか。あてはまるものを一つ選んでください。

- A 日本のアニメや映画を見て興味を持ったから B 先生や親にすすめられたから
C 日本の文化や社会に興味があったから D 就職に有利になると思ったから
E その他

(Eを選んだ人はその理由を具体的に書いてください。)

2 もうすぐ日本語学習は終わりますが、日本語を勉強してどうでしたか。あてはまるものを一つ選んでください。

- A とてもよかった B よかった C よくなかった D わからない

2-(1) 2の質問についてなぜそう思ったのか、理由を具体的に書いてください。

3 日本語を学習しているときのあなたの感覚はどうでしたか。あてはまるものを一つ選んでください。

- A おもしろくて役に立った B おもしろかったが、役に立たなかった
C 役に立ったが、おもしろくなかった D おもしろくもなく、役にも立たなかった
E おもしろくなかった F 喜びだった G 苦痛だった

4 就職についての質問です。あなたにあてはまるものを一つ選んでください。

- A 日系企業に就職したい B 日本語と関係ある仕事をしたい C 日本語とは関係なく就職を考えている
D 自分の方針をまだ決めていない E 就職しない

5 日本についての質問です。将来、チャンスがあったら日本へ行きたいですか。

- A 行きたい B 行きたくない C わからない

(A, Bを選んだ人は、その理由を具体的に書いてください。)

上の質問でAを選んだ人は、日本で何がしたいですか。あてはまるものを一つ選んでください。

A 留学 B 就職 C 観光・買い物 D その他

(Dを選んだ人は、日本で何がしたいか具体的に書いてください。)

6 工商学院には日本人の日本語教師がいますが、日本人日本語教師への要望がありますか。

A 要望がある B 要望はない C わからない

(A, Bを選んだ人は、その理由を具体的に書いてください。また、Aを選んだ人は、どんなことを要望するか、その内容を教えてください。)

7 卒業後も日本語の勉強を何らかの形で続けますか。

A 続けるつもりだ B 続けるつもりはない C わからない

(A, Bを選んだ人はその理由を教えてください。)

8 今後の日本、日本人との関係について、どんなことを希望するか、あなたの意見を自由に書いてください。

アンケート調査へのご協力ありがとうございました。

2012年12月 松田公平